

女子大学生の授業中における 座席選択と怠学行動の規定因

川西千弘*

Factor to Provide for the Female University Student's Seat Choice and Misbehavior

Chihiro KAWANISHI

The present study investigated the effects of motivation to specified lecture, learning aspect, awareness for college life and students' apathy on seat choice and misbehavior (such as whispering, doze and action out of the class) using data from 161 women university students. The results showed the following on covariance structure analysis: (1) inference of feelings of interpersonal adjustment and action out of the class had a direct impact on seat choice; (2) inference of feelings of interpersonal adjustment and non-goodwill to the teacher had a positive impact directly on whispering; (3) inference of bad learning manner to be caused by students' apathy and deterioration of ethics for the class had a positive impact directly on doze. (4) inference of feelings of interpersonal adjustment, lower sense of belonging to the university and learning carelessness feeling had a positive impact directly on action out of the class.

key words: seat choice, misbehavior, motivation, learning aspect, students' apathy

問 題

川西 (2006, 2009) は、多人数の講義科目で学生が好んで着席する座席がほぼ一貫している様子に着目し、彼らがどのような動機や心理的要因でそのような行動に至るのかを検討した。その結果、無力感や大学生生活不安の高さが直接、あるいは大学への帰属意識の低さを介して間接的に学習意欲を低下させ、これが後方の座席を選好するというパフォーマンスを引き出すことが明らかになった。ただし、これらの研究では座席選択行動の測定に場面想定法を用い、おもしろい授業時など各条件を提示したうえで教室内の前後の直線的距離で座席位置を尋ねるといった非常に単純化した回答方法をとった。だが、座席選択行動をより適正に予測するモデルを構築するに

は、講義における学生の実際の座席選択を測定すること、さらに授業担当者への好悪感情や友人関係など学生生活にまつわるより多様な要因を測定して検討することが肝要と考えられた。

さて、教員が学生をより深く理解したうえで授業を進めるには、上述した座席選択行動のみならず、授業中の私語、居眠りおよび当該授業と関係のない行為（例、携帯電話などによるゲーム・メールや他の授業の課題作成、以下これを総称して授業外行動と記す）など様々な怠学行動の背景にある心理的問題やその発現メカニズムについても理解することが肝要であろう。怠学行動の1つである私語については、これまで様々な角度から検討が行われている。例えば、出口・吉田 (2005) は社会的スキルや他者視点取得の高い人ほど私語を「してはいけないこ

* 京都光華女子大学

Kyoto Koka Women's University, 38 Nishikyogukadono-chou, Ukyou-ku, Kyoto-shi, Kyoto 615-0882, Japan

と」と認識していながら私語の頻度が高く、対人関係を適応するために私語を行うことを指摘した。また、卜部・佐々木(1999)は中学・高校・専門学校で調査を行い、生徒は「クラスみんなは私語に寛容だから私語してもかまわない」という彼らの準拠集団の期待に応え「偽悪的」に私語を行っていることを明らかにした。さらに、出口(2005, 2007)は座席選択と私語の関連性を検討し、後方を選択する学生ほど授業と無関係の私語が多く(2005, 2007), かつ話しかけられやすい傾向(2007)があることを明らかにした。なお、出口他(2005)では学業に対する適応感が、授業と無関係の私語と微弱な負の相関を、逆に授業に関する私語とは微弱な正の相関を示すことを明らかにしている。

また、授業中の居眠りについて、松本・松嶋(2008)が高校生を対象に調査を実施し、授業中の居眠り経験者は88.7%で、就寝時間が遅い者ほどまた睡眠時間が短い者ほど頻繁に授業で居眠りをする者が多く、「少し寝ると楽になる」「成績や進路に関係なければ眠る」「部活やアルバイトに備えて」など自己都合で居眠りが誘発されることを明らかにしている。また眠りやすい要因として、疲労や朝食の欠食などもあげられたが、教員の口調や指名の低頻度なども原因となることが示された。逆に、眠りにくい要因として、「楽しい時間」や「好きな教科」など授業へのコミットメントの高さが報告された。

さらに授業外行動については、栗林(2014)が大学生を対象に授業中の携帯電話(スマートフォンも含む)使用について、公的自己意識の個人差から検討を行った。その結果、授業中の携帯電話使用目的はメールが43%, インターネットが32%, アプリ9%, ゲーム7%で、隠れ使用が可能なものの利用頻度が高かった。特に公的自己意識の高い人は、他者からの反応に敏感なために授業中予期せぬ着信音で注目を集めることを避けようとするのが示された。また、Tindell & Bohlander(2012)が大学生に授業中のメール使用について尋ねたところ、「集中力が損なわれかつ(または)成績が悪くなる」(31.5%)「近くに座っている学生の気を散らすことになる」(24.7%)など自他の学習への悪影響をあげているものの「問題なし」が28.9%も存在することを明らかにした。そのほか、Durmuscelebi(2010)は小学生対象に教室での問題行動を調査し、「授業中に別のこ

とをする」は28項目中私学で5番目(州立で6番目)に頻度が高く、見過ごせない怠学であることを指摘している。

以上のことから、座席選択や種々の怠学行動は学習意欲や様々なパーソナリティ要因と密接に関連することが示唆されているが、これらの研究の多くは座席選択や各怠学行動を個々に扱い、より多角的視点からの規定因説明やその規定因の同異については十分な議論がなされていない。そこで、本研究では授業要因、大学生活意識、パーソナリティおよび学習態度という多様な変数を取り上げ、座席選択と怠学行動の背景にある心理的問題とその同異を探ることにした。まず、授業要因として調査を実施する授業担当教員への好悪感情、授業満足度、授業内容への興味を取り上げる。坂本(2005)は、学生の授業評価と授業参加への自己評価の関連を調べ、「教員の授業中の学生への接し方」および「学生を引きつける授業」は、いずれも「学生の授業態度の自己評価(例、私は私語をすることもなく、真剣に授業を受けた)」と正の相関があることを見いだした。このことから、好感情を持つ教員の授業やおもしろい授業では、学生の授業への動機づけが高まることで、後方への座席選択や怠学行動の表出が抑制されるが、そうでない授業ではこの動機づけの触発が困難なために個人の学習意欲低下や心理的問題が顕現化し、後部座席選択や怠学行動が誘発される可能性が考えられた。さらに、本研究では当該授業の単位必要性についても測定する。なぜなら、単位が必要な人ほど受講態度が評価に反映されることに敏感で、様々な怠学行動が抑制されると考えるからである。

次に、本研究では大学生活意識としてまず大学への帰属意識について検討する。帰属意識とは集団への同一化や残留希望及びその集団の目標・規範・価値の受容などにより表象される。中村・松田(2015)は大学帰属意識(大学への愛着)が低いほど「大学生活が辛い」などの大学不適応が大きくなり、これが出席率やGPAに負の影響をもたらすことを明らかにしている。このような心理過程を考慮すると、自分の所属する大学にどのような感情を抱き、そこに所属することをいかに捉えているかという社会的アイデンティティは、自分の所属集団と自己を同一化し、その集団の肯定性を自己に取り込むことによって自己評価を高めようとする(加来, 1987, p. 136)こ

とを考慮すると、大学生の自我形成と学習行動に関わる心理変数と考えられる。なお、中村他(2015)では、この大学帰属意識に大きく関与する変数として友人関係の良好さを上げており、また前述した私語の要因にも友人との適応の影響が示されていることから、本研究でも大学生生活全般における友人や教員との関係性を加え、大学生生活意識として検討する。

さて、前述したように教室における学生の座席選択や怠学行動はパーソナリティとも密接な関係があるとされているが、これまでの研究では自尊心、特性不安及び自己意識などいわゆる性格特徴に関する個人差が主に取り上げられていた(Hillmann, Brooks, & O'Brien, 1991; Rebata, Brooks, O'Brien & Hunter, 1993; 出口, 2005)。しかし、大学生の実体をより詳細に把握するなら、大学生だからこそ陥りやすいパーソナリティの病理や不適応現象に着目し、これが学習時の様々な問題行動に及ぼす影響を検討することが必要であろう。そこで、本研究ではステューデント・アパシー(以下ではS・アパシーと記す)を取り上げる。S・アパシーは、自らの意志で改善することが全く不可能な慢性的無気力状態のことで、勉学への意欲が喪失し、自発的・能動的行動が消失して学業継続が困難になるとされている。大学生がこのような病理現象を呈する原因として、我が国では過酷な入試に備えての過剰学習や本意入学による不適応などが指摘されている(山口, 1999, p. 14)が、S・アパシーは精神病理的側面と大学生の青年期課題に関わる発達心理的側面とが混在する多面性を持つ(下山, 1995)ため、その発生機序や障害概念について様々な議論があり、近年でもその様相が一般的無気力といかなる相違があるのかについて検討が重ねられている(狩野・津川, 2011)。ただし、本研究では授業に参加している学生を対象とするため、宗像(1997)に準じ一般学生(留学生および社会人は本研究参加者とししない)に見られるS・アパシー傾向についての個人差を測定する。なお、宗像(1997)は、このS・アパシー傾向に①生きがい・目標・進路の喪失②情意の減退③自己否定④優劣勝敗への過敏さ⑤受動性⑥交友関係の貧困など6つの特徴あげ、尺度構成を行っている。

なお、学習態度が座席選択や怠学行動に及ぼす影響については前述したように様々な研究で指摘されている(出口・吉田, 2005; 川西, 2006, 2009)ので、

ここでも規定因として取り上げる。以上、本研究では座席選択と怠学行動(私語, 居眠り, 授業外行動)が、様々な授業要因, 帰属意識を含む大学生生活意識, S・アパシーおよび学習態度により、どのようなメカニズムで発現するのか、さらにそのメカニズムにいかなる同異があるのかを探索的に検討する。

方 法

調査参加者

女子大学生 161 人を対象とした。その所属は、心理学科 84 人(52.2%) キャリア形成学科 25 人(15.5%) 文学科 12 人(7.5%) 健康栄養学科 28 人(17.4%) 不明 12 人(7.5%) で、学年構成は、1 年生 99 人(61.5%), 2 年生 50 人(31.1%), 3 年生 9 人(5.6%), 不明 3 人(1.9%) であった。

手続き

同教室かつ別時間帯で行われる 3 科目の授業(必修科目 1, 選択科目 2)で調査を実施した。いずれも授業終了後調査協力を依頼し、承諾した学生のみに以下の質問紙を配布し、適宜回収した。

質問紙

質問紙の構成 属性(学科, 学年)を尋ねた後、座席選択行動尺度, 授業要因尺度, 学習態度尺度, 大学生生活意識尺度およびS・アパシー尺度の順で質問紙を構成した。

使用尺度 1. 座席選択行動尺度 この調査を行った教室は三人掛け机が横 3 列, 縦に 18 列の非常に縦長の教室であったので、各縦列に最前列を 1 として座席番号を机上に付し、以下の質問に回答を求めた。なお、その際横列については弁別せず同番号とした、①自分が座っている座席列番号(以下、座席列)、②その座席はどのようにして選択したか(以下、座席選択理由)、③自分ひとりで自由に座席を選択できるとしたら現在の座席からどの様に移動するか(以下、希望座席, 回答例: 3 列前方)④現在の座席はいつもとほぼ同じ位置か否か(以下、座席選択頻度)。なお、回答方法は結果の座席選択の諸相に記載した。

2. 授業要因尺度 調査を実施した授業に関して以下の項目について尋ねた。①「この授業は興味もてる」(以下、授業興味)、②「この授業に満足している」(以下、授業満足)、③「この授業の単位が必要である」(以下、単位必要性)④この授業担当

者(教員)に好意が持てる」(以下, 好意), ⑤「この授業の中で, よく私語をする」(以下, 私語), ⑥「この授業の中で, よく居眠りをする」(以下, 居眠り), および⑦「この授業の中で, よく内職(他の授業の課題あるいは携帯メールなどこの授業の学習以外の行動)をする」(以下, 授業外行動)について, 「非常にあてはまる7」から「全くあてはまらない1」の7件法で回答を求めた。なお, これより上記①②④を総称する際, 授業動機づけと記す。

3. 学習態度尺度 学生生活の領域ごとに学生の意欲低下を測定する意欲低下領域尺度(下山, 1995)のうち学業意欲低下及び授業意欲低下に関わる5項目に「難しいことでも新たに学ぶことは楽しいと思う」など4項目を付け加えて尺度を構成した。なお, 前述した卜部他(1999)の準抛集団の規範意識や期待も座席や怠学行動に影響する変数と考えられるため, 本研究ではこれを倫理観と表記し, 「授業中の私語や居眠りおよび内職(授業外行動)は, いけないことだと思う」(以下, 倫理観)と「あなたの仲のよい友人は授業中の私語や居眠りおよび内職(授業外行動)についてあたりまえだと考えている」(逆転項目, 以下, 友人倫理観)についても併せて回答を求めた。回答方法は上述同様の7件法であった。

4. 大学生生活意識尺度 大学への同一化や帰属感を測定するために, 川西(2006, 2009)で用いた項目の中から4項目を選択し, 大学への帰属意識を測定する項目とした。これに加え, 友人や教員への適応状況を測定するために, 高橋・内藤・浅川・古川(1986)の学校生活適応感尺度のうち友人および教員関係に係る各3項目を付加した。回答方法は上述同様の7件法であった。

5. S・アパシー尺度 アパシー傾向尺度(宗像, 1997)の下位因子である未来不安定因子と非自主性因子から各1項目と自己否定因子から2項目の計4項目を選択した。さらにアパシー心理性格尺度(下山, 1995)の下位因子である張りのなさ因子, 味気のない因子, 適応強迫因子から各1項目と自分のなさ因子から3項目の計6項目を選択した。ただし, 下山(1995)の味気のない因子の1項目のみ内容は類似しているが女子大学生の視点に合わせ「友達の考えに流されることなく自分の意見が言える」という表現に変更した。また, アパシーと対極にある自

主性などポジティブな項目を逆転項目として加え合計20項目を用いた。回答方法は上述同様の7件法であった。

結 果

座席選択の諸相

座席選択理由は, 「友人と相談して決めた32.5%」「友達が決めた15.3%」「そこしか空いてなかった9.8%」「自分で決めた36.8%」であった。また, 希望座席では, より後方を希望したものの14.3%, より前方を希望したものの11.2%, 変化なしが74.5%であった。座席選択頻度については, 「いつも36.8%」「ときどき25.2%」「たまに22.7%」「今日初めて15.3%」であった。このように実際の座席選択では, 選択理由や頻度など様々に統制できない剰余変数が混入し, これを統制するには各要因で分析する必要があるが, それは人数が分散して困難であった。そこで, やむなく以下の分析では実際の座席列ではなく, 学生個人の真意が反映された希望座席分を調整した座席列(以下, 希望後座席)を用いた。

尺度構成

学習態度尺度 個別に分析する「倫理観」と「友人倫理観」を除いた9項目に対して最尤法(プロマックス回転)による因子分析を行った。その結果, 固有値の変化は2.85, 1.86, 1.02, 0.82, 0.74…で, 回転後の因子パターンの単純性・解釈可能性から3因子解が妥当であると判断した(累積寄与率63.67%)。因子ごとに因子負荷量0.47以上および他の因子との負荷量差が0.20以上の項目を抽出した。第1因子は3項目($\alpha=.869$)で, 「何となく授業をさぼることがある」など, 授業出席意欲の低さや授業課題の不履行といった内容の項目が高い負荷量を示したので「学習怠情」因子と命名した。第2因子は4項目($\alpha=.659$)で, 「教員に言われなくても自分からすすんで勉強する」など勉強への意欲や自主的に学習する姿勢といった内容の項目が高い負荷量を示したので「学習意欲」因子と命名した。ただし, 第3因子は上記基準だと「しなければならないことがあってもなかなか取り掛かれない」1項目になるので, 以下の分析から除外した。

大学生生活意識尺度 10項目に対して上記同様の因子分析を行った。固有値の変化は3.24, 1.95, 1.40, 0.92, 0.73…で, 回転後の因子パターンの単純性・解

積可能性から3因子解が妥当であると判断した(累積寄与率 65.88%)。因子ごとに因子負荷量 0.42 以上および他の因子との負荷量差が 0.13 以上の項目を抽出した。第1因子は3項目($\alpha=.836$)で、「私は自分の大学が好きである」など大学への愛着や満足感といった内容の項目が高い負荷量を示したので「大学帰属意識」因子と命名した。第2因子も3項目($\alpha=.768$)で、「この大学に楽しい友人関係を持っている」など、大学での友人関係の受容と満足感といった内容の項目が高い負荷量を示したので「友人関係良好さ」因子と命名した。第3因子も3項目($\alpha=.697$)で、「この大学の教員と話す機会を持つようとしている」など教員とのラポールに結びつく内容の項目が高い負荷量を示したので「教員魅力」因子と命名した。

S・アパシー尺度 20項目に対して上記同様の因子分析を行った。固有値の変化は 4.49, 2.15, 1.84, 1.53, 1.31, 0.99, 0.98 で、回転後の因子パターンの単純性・解釈可能性から5因子解が妥当であると判断した(累積寄与率 56.55%)。因子ごとに因子負荷量 0.40 以上および他の因子との負荷量差が 0.20 以上の項目を抽出した。第1因子は5項目で($\alpha=.749$)、「多数決の意見と違っても自分の意見を言う」など自分の原理原則に基づいて行動する内容の項目が高い負荷量を示したので「自主性」因子と命名した。第2因子も5項目($\alpha=.720$)で、「自分自身の本当の姿がつかめない」など自信のなさやアイデンティティ模索状態といった内容の項目が高い負荷量を示したので「自信欠乏」因子と命名した。第3因子は3項目($\alpha=.680$)で、「自分の将来といっても現実感がない」など自分の将来や目標への不安といった内容の項目が高い負荷量を示したので「未来不確実性」因子と命名した。第4因子も3項目($\alpha=.483$)

で、「困難なことでも集中して取り組む」など、課題への真面目な態度といった内容の項目が高い負荷量を示したので「真摯性」因子と命名した。第5因子も3項目($\alpha=.642$)で、「嫌なことがあっても人やものに八つ当たりしない」など情緒の安定といった内容の項目が高い負荷量を示したので「情緒安定性」因子と命名した。ただし、「真摯性」については、 α 係数が低すぎるため以下の分析から除外した。

なお、学習態度尺度、大学生生活意識尺度およびS・アパシー尺度については得点が高いほど下位因子名に沿った特性が高いように数値化し(例、数値が高いほど学習意欲ではポジティブな側面が、一方学習怠情ではネガティブな側面が強くなる)、かつ下位因子ごとに平均と標準偏差を算出して、以下の分析に用いた。なお、座席選択行動尺度と授業要因尺度については、各単一質問項目で平均と標準偏差を算出し、以下の分析に用いた。

学習態度、大学生生活意識及びS・アパシーが座席選択と各怠学行動におよぼす影響過程

まず、予備分析として各変数間でピアソンの相関係数を算出した。その結果、モデル構成に関与した変数間には、Table 1 のような特徴がみられた。表中以外で特記すべき結果は以下のとおりであった。「私語」では「授業興味」($r=-.230, p<.01$)「授業満足」($r=-.255, p<.01$)との間に負の相関がみられた。また「居眠り」は「授業興味」($r=-.219, p<.01$)「授業満足」($r=-.222, p<.01$)との間に負の相関がみられた。

これらを確認したうえで、本研究の主目的である座席選択と怠学行動(私語, 居眠り, 授業外行動)を規定するメカニズムを解明し、その同異を包括的に明らかにするためモデルを構築し、それを基に共

Table 1 怠学行動と授業関連項目・学習態度・大学生生活意識・S・アパシーの関連性

	(怠学行動)			(学習態度)			(大学生生活意識)		(S・アパシー)			
	私語	授業外行動	居眠り	教員への好意	倫理観	学習怠情	学習意欲	大学帰属意識	友人関係良好さ	自主性	未来不確実性	
平均(SD)				4.79 (1.77)	5.02 (1.21)	3.25 (1.70)	4.25 (.92)	4.53 (1.28)	4.96 (1.11)	3.93 (.93)	4.64 (1.24)	
希望後座席	6.01(3.31)	.203*	.370**	.118	-.161*	-.064	.156*	-.041	-.128	.226**	-.062	.123
私語	4.08(1.81)		.400**	.165*	-.338**	-.112	.054	.031	-.095	.332**	-.079	.000
授業外行動	3.40(1.81)			.371**	-.128	-.086	.383**	-.110	-.215**	.229**	-.066	.217**
居眠り	2.96(1.74)				-.199*	-.236**	.312**	-.257**	-.165*	.061	-.178*	.103

* $p<.05$, ** $p<.01$

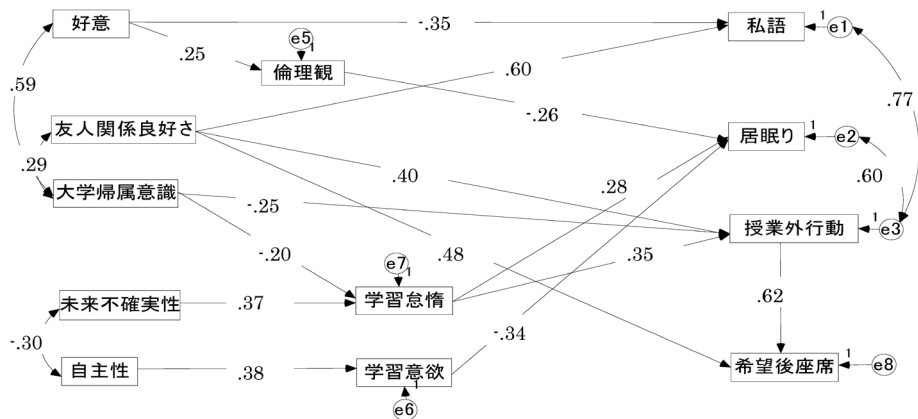


Figure 1 座席選択と怠学行動の規定因

分散構造分析を行った。モデル構成の前提として、以下の5つの経路を考えた。個人のパフォーマンスを推測する経路には、①S・アパシーが直接行動に作用するルートと②S・アパシーが学習態度に影響し(川西, 2009)、二次的の反応として行動決定されるルートが考えられる。前者は、S・アパシーが、授業に積極的に参加しようとする行動を直接退け、授業をボイコットしないまでも授業拒否あるいは無視したい気持ちが体现されて、後方の座席選好や様々な怠学行動を誘発するルートである。一方後者は、S・アパシーが募れば勉学への意欲・関心が減少するなど学習態度の悪化を介して、後方座席の選好や怠学行動が促進されるルートである。さらに、③当該授業要因や大学生生活意識は大学での環境的諸側面であり、これらは状況依存的であるため、個人の特性であるパーソナリティや学習態度に関与せず、むしろ直接座席選択や様々な怠学行動を規定すると考えられる。ただし、川西(2009)や中村他(2014)では、大学帰属意識のなさが学習意欲低下に大きな影響を与えることが確認されているため、本研究でも大学生生活意識のうち大学帰属意識については、④座席選択や怠学行動に直接影響を及ぼすルートと、⑤学習態度に影響を及ぼしその二時的の反応として後方の座席選択や怠学行動を生み出すと仮定した。

なお、探索的に検討するため各変数について、上述した前提ルートに基づき対象とされる変数より前段階の全変数を独立変数とする重回帰分析を行い、そのうち有意なものを基にパスを選定した。適合度指標を参考にパスを選別し、Figure 1のモデルを採

用した。母数の推定方法には、最尤法を用いた。また、怠学行動である私語、居眠りおよび授業外行動には正の相関がみられ、これらの変数間には上記関係性では説明しきれない共変動が仮定されるため、これらの変数の誤差項に共分散を仮定した。

分析の結果、適合度は $\chi^2(47)=50.93$ (n.s.), GFI=.947, AGFI=.912, CFI=.984, RMSEA=.023で、十分な値が示された。構築したモデルにおける各変数間の主な関係性は以下のとおりであった。まず、「希望後座席」については「友人関係良好さ」と「授業外行動」が正の影響をあたえていた。「私語」については、当該授業教員への「好意」が直接負の影響を、「友人関係の良好さ」が直接正の影響を与えていた。「居眠り」については、当該授業教員への「好意」が「倫理観」に正の影響を与え、この「倫理観」が「居眠り」に対して負の影響を与えていた。また「自主性」が学習意欲に正の影響を与え、この「学習意欲」が「居眠り」に負の影響を与えていた。さらに「未来不確実性」と「大学帰属意識」の低さから誘引された「学習怠情」は「居眠り」に正の影響を与えていた。「授業外行動」については、「大学帰属意識」が直接負の影響、「友人関係の良好さ」が直接正の影響を与えていた。さらに「学習怠情」が「授業外行動」に正の影響を与えていた。

座席と怠学行動を組み合わせた分析

座席と各怠学行動の組み合わせにより、授業動機づけ、学習態度、大学生生活意識およびS・アパシーにどのような差異があるのかを直接検討した。具体的には、希望後座席を3等分し、かつ各怠学行動につ

Table 2 座席と私語を組み合わせた分析における平均 (SD)

座席・私語	前・少群 (26人)	前・多群 (28人)	後・少群 (9人)	後・多群 (32人)	
授業興味	5.35 (1.29)	5.18 (1.63)	6.00 (0.71)	4.31 (1.51)	前・少群>後・多群, 後・少群>後・多群
授業満足	5.15 (1.35)	4.96 (1.69)	5.89 (0.93)	4.09 (1.49)	前・少群>後・多群, 後・少群>後・多群
好意	5.46 (1.42)	4.93 (1.84)	5.78 (0.97)	4.09 (1.84)	前・少群>後・多群, 後・少群>後・多群
友人関係良好さ	4.37 (1.17)	5.00 (0.85)	5.00 (1.31)	5.34 (0.91)	前・少群<後・多群

Table 3 座席と居眠りを組み合わせた分析における平均 (SD)

座席・居眠り	前・少群 (38人)	前・多群 (17人)	後・少群 (27人)	後・多群 (13人)	
授業興味	5.61 (1.15)	4.35 (1.66)	4.56 (1.50)	4.38 (2.06)	前・少群>前・多群, 後・少群, 後・多群
授業満足	5.26 (1.29)	4.35 (1.87)	4.48 (1.50)	3.85 (1.72)	前・少群>後・多群

Table 4 座席と授業外行動を組み合わせた分析における平均 (SD)

座席・授業外行動	前・少群 (41人)	前・多群 (13人)	後・少群 (14人)	後・多群 (25人)	
単位必要性	5.29 (1.54)	6.46 (0.78)	5.00 (1.57)	5.96 (1.24)	前・多群>前・少群, 後・少群
学習怠情	2.72 (1.56)	3.98 (1.64)	2.79 (1.60)	3.96 (1.90)	前・少群<後・多群

いて、「全くあてはまらない1～ややあてはまらない3」と回答した者を少群、「どちらでもない4」を中群、「ややあてはまる5～非常にあてはまる7」と回答した者を多群として3分割し3×3の9群を弁別した。そして、座席1/3より前方を希望し私語が少ない・しないと回答した群（以後、私語前・少群）、座席1/3より前方を希望し私語が多いと回答した群（以後、私語前・多群）、座席1/3より後方を希望し私語が少ない・しないと回答した群（以後、私語後・少群）および座席1/3より後方を希望し私語が多いと回答した群（以後、私語後・多群）を抽出して独立変数とし、学習態度、大学生生活意識、S・アバシーの各下位因子および授業動機づけの各項目を従属変数として1要因分散分析を行った。なお、「居眠り」「授業外行動」についても同様に9分割し、4群を抽出して同様の分析を行った。以下には、有意な差が検出された項目のみ記載する。

座席・私語の組み合わせ 授業動機づけのうち「授業興味」「授業満足」教員への「好意」で有意（順に、 $F(3, 91)=4.52, p<.01$; $F(3, 91)=4.69, p<.01$; $F(3, 91)=4.28, p<.01$ ）になった。また、大学生生活意識では「友人関係良好さ」が有意（ $F(3, 91)=4.46, p<.01$ ）だった。いずれの変数に対しても多重比較

を行ったところ、Table 2の差異が確認された。

座席・居眠りの組み合わせ 授業動機づけのうち「授業興味」「授業満足」で有意（順に、 $F(3, 91)=4.58, p<.01$; $F(3, 91)=3.56, p<.05$ ）となった。いずれの変数に対しても多重比較を行ったところ、Table 3の差異が確認された。

座席・授業外行動の組み合わせ 授業要因のうち「単位必要性」で有意（ $F(3, 89)=3.79, p<.05$ ）となった。また、学習態度では「学習怠情」のみで有意（ $F(3, 89)=4.06, p<.01$ ）であった。いずれの変数にも多重比較を行ったところ、Table 4の差異がみられた。

考 察

本研究の目的は、当該授業要因、学習態度、大学生生活意識およびS・アバシーが、授業中の女子大学生の座席選択と怠学行動（私語、居眠り、授業外行動）に及ぼす影響を明らかにし、それらの行動の発現機序の同異を精査することであった。

そこで、共分散構造分析を行ったところ、まず「希望後座席」は「友人関係良好さ」と「授業外行動」から直接正の影響を受けていた。つまり、友人との関係を重視し同調的な行動をするために、ある

いは教員には見づかりたくない隠れた行動をするために、教員とは物理的・心理的距離感を取ろうとして学生は後部座席を選択することが示唆された。川西(2009)では座席選択の規定因として学習態度が直接影響していたが、本研究ではそれらは示されなかった。川西(2009)では授業動機づけや友人関係など今回測定した多くの変数が測定されない状況でのモデル作成だったので、本研究のモデルの方がより妥当性が高いと判断された。

次に怠学行動については、私語、居眠りおよび授業外行動でその発現の規定因が異なることが明らかになった。まず、私語については、当該授業教員への「好意」が私語を抑制する一方で、「友人関係の良好さ」が私語を促進していた。他の怠学行動は本人にのみ不利益になるが、私語は他の学生に迷惑や悪影響(例、集中力の低下や私語の伝搬など)をもたらすため、教員は放置できない。この点から私語は教員への挑発的行動と捉えることも可能であり、その意味で私語は学生の教員への好嫌感情を表現する集団的手段なのかもしれない。また友人関係が良好なことが私語を発現させる様相が示された。出口他(2005)は、対人関係の適応のために私語を行う可能性を指摘していたが、本研究でも同様の示唆が得られた。

「居眠り」については、教員への「好意」が「倫理観」を高め、この「倫理観」が「居眠り」を抑制していた。また「自主性」が高いことが学習意欲を喚起し、この「学習意欲」の高さが「居眠り」を抑制した。さらに「未来不確実性」や「大学帰属意識」の低さに誘引された「学習怠情」は「居眠り」を誘発していた。「居眠り」については、生活習慣の問題性が指摘されていたが(松本他, 2008)、それ以外に上述した授業への倫理観のなさや学習態度の悪化が居眠りを発現させることが明らかになった。確かに居眠りは、私語のように教員に挑発的態度を示すものではなく、かつ授業外行動のように授業を忌避する行為でもない。そういう意味では私語や授業外行動と異なり、居眠りは抑えがたい生理的欲求により発生する。しかし、その背景には、授業への倫理観の希薄さとS・アパシーがもたらす一連の学習への無気力が潜んでいた。

「授業外行動」では、「大学帰属意識」が「授業外行動」を抑制する一方で、「友人関係の良好さ」が

授業外行動を促進していた。さらに上述同様「未来不確実性」や「大学帰属意識」の低さに起因する「学習怠情」が「授業外行動」を促進していた。つまり、自分が所属する大学に否定的あるいは希薄な社会的アイデンティティしか持ち得ないことが授業外行動を促していた。このように所属大学への社会的アイデンティティが低い場合、その規範やルールは軽んじられ、授業中でも自分のしたいことが優先された。また、友人関係の良好さが授業外行動を誘発し、ここでも私語と同様に友人関係を適応的に保つための同調的行動として、またメールなどで授業妨害にならない方法で学内外の友情を確認する行動として授業外行動をとっている可能性が考えられた。ただし、友人関係の良好さが大学帰属意識と正の関連を持ち、後者が授業外行動を抑制するので、友人関係良好さは授業外行動減少に間接的関わりをもつという複雑な関係を示していた。さらに、上述した大学帰属意識が低くかつ自分の未来像が見つからないことが学習怠情を引き起こし、それが目前の学業に傾注できない状況を生み、授業をボイコットしたい心理の裏返しとして授業外行動へ繋がっている可能性が示唆された。

以上のことから、私語や授業外行動は友人関係の良好さを担保するために同調的な行為として起こるが、私語は当該教員へのより挑発的な行為として、授業外行動は所属大学へのコミットメントの低さから発生すること、これに対し居眠りは主に学習への無気力や倫理観の無さに起因することが示された。

次に、座席選択と怠学行動を組み合わせた分析では以下のことが明らかになった。まず座席と私語の組み合わせでは、「授業興味」「授業満足」「好意」で後方・私語多群は座席にかかわらず私語少群より得点が低く、一方「友人関係の良好さ」では前方・私語少群より得点が高かった。出口(2007)でも教室後方を選好するほど「授業と無関連の私語」「私語を話しかけられる頻度」および「友人の数」が多い傾向がみられており、本結果もこれと整合的な傾向が確認された。これらを併せて考察すると、授業に興味や満足が低く当該授業担当教員に非好意的であることが友人関係の適応性を優先させ、授業への忌避感から後方座席で私語という迷惑行為を多発させることに繋がっていた。これに対し後方座席でも私語が少ない学生は、前述したように、授業への興

味や満足および教員への好意など肯定的授業動機づけが高かった。このポジティブな動機づけの高さが迷惑行動を抑制するが、暗黙裡に授業への集中やコミットメントを求められる前方座席は避けようとするのかもしれない。さらに、前述したように前方・私語少群は後方・私語多群より「友人関係良好さ」で得点が低かった。これは、真面目なもの同士狭いしかし深い人間関係を構築するかあるいは友人関係の希薄さが授業に集中しやすい前方座席を嗜好させるのかもしれない。

次に、座席と居眠りの組み合わせでは、前方・居眠り少群がその他の群より授業に興味を持ち、少なくとも後方・居眠り多群よりは授業に満足している様相が示された。

また、座席と授業外行動の組み合わせでは、前方・授業外行動多群は、座席にかかわらず授業外行動少群より「単位必要性」が高かった。つまり、単位が必要なために前方に着座するという一見真面目な態度を示しているが、このような動機づけでは授業外行動を抑制するに至らないことが示された。さらに、「学習怠情」では後方・授業外行動多群は前方・授業外行動少群より高く、後方座席で授業外行動頻度が高い学生は、授業に出席してはいるものの授業に対し熱心に取り組めない心理を抱えていた。

最後に、本研究の今後の課題について述べたいと思う。まず第1に、今回の調査では調査参加者数が161人で、しかも女子大学生のみを対象とした。そのため、確固たるモデルを導くには十分な数とはいええず、かつ座席選択理由や座席選択頻度を加味した詳細な検討が出来なかった。また「友人関係の良好さ」など性差が生じるのかもしれない変数が過剰に結果に影響した可能性は否定しきれない。今後は男女を対象とし、更なる調査参加者数を確保して検討を重ねる必要がある。第2に、本研究では「倫理観」について各怠学行動を一括して「してはいけないと考える程度」を尋ねた。上述したように私語・居眠り・授業外行動は異なるメカニズムで発生しており、それらに対する倫理観の内容や程度も異なる可能性がある。また、教員への「好意」もその人柄や教育スキルを弁別せず一括して測定した。このように多様な概念を含む変数を一括して測定したため、座席選択や各怠学行動への影響過程を詳細に検討できなかった可能性がある。第3に、本研究では、座

席、私語、居眠りおよび授業外行動を同時に取り上げかつ後者3つの怠学行動変数間の相関の高さから有意なものについては誤差項に共分散を仮定して分析を行った。そのため、適合度が高まった可能性は否定しきれない。また、内的整合性の低さにより「真摯性」などモデル構成の変数として加味できなかったものがあり、この影響についても不明瞭さが残った。第4に、共感性(出口他, 2005)など様々なパーソナリティの個人差や成績など、座席選択や怠学行動に影響を及ぼす変数はほかにも存在する。また、本研究では私語、居眠り、授業外行動を怠学行動としてとりあげたが、欠席や遅刻など授業をボイコットする行動には、本研究の怠学行動とは異なる規定因が潜んでいる可能性が考えられた。そのため、今後はより多様な変数を取り上げ、より包括的な規定因解明を図るべきである。

本研究は授業という最も身近な場で展開される「座席選択や怠学行動が、どのような心理的要因を背景とし、いかなる経路でその行動が発現するのか」、また「座席と怠学行動の組み合わせからどのような場所で怠学する群がいかなる問題を抱えているのか」について有意な結果を得ることができた。例えば、後方座席にいても私語が少ない群は授業への興味・満足度が高いが、前方座席を選択しても居眠りをする群はむしろ授業に対する興味が低かった。これらは、一概に後方座席を選択する学生に問題があるとはいえないことを示していた。また、全般的な学習への意欲・関心の低さが私語を多発させるわけではなく、後方座席で私語をする群はなるほど当該授業への興味・満足度は低いものの、友人関係においてはむしろ適応的であるなど複雑な様相も示された。教員は、学生をより深く理解するために、彼らの行動からその心理的問題を推測する必要性に迫られるが、本研究では座席選択行動と様々な怠学行動を同時に扱うことで、その推測への一助になる知見が得られた。また、教員が学生とラポールを形成し学生の授業への動機づけを高める工夫をすること、および学生の大学への帰属感を高める環境を整えることが、怠学行動の抑止に繋がることが示唆された。上述したように、より包括的なモデル構築には課題が山積しており、座席選択や怠学という学生のサインが何を意味しているのか、さらに理解を深める努力をしていく必要があろう。

引用文献

- 出口拓彦 2005 私語に対する規範意識・集団規範の認知と頻度の関連: 公的・私的自意識および座席位置に着目して 藤女子大学紀要, 第II部, 43, 13-18.
- 出口拓彦 2007 大学の授業における私語と視点取得・友人の数・座席位置の関連: 「私語をすること」「私語をされること」の相違に着目して 藤女子大学紀要, 第II部, 44, 45-51.
- 出口拓彦・吉田俊和 2005 社会大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連: 大学生生活への適応という観点からの検討 心理学研究, 21(2), 160-169.
- Durmuscelebi, M. 2010 Investigatoin students misbehavior in Classroom management in state and private primary schools with a comparative approach. *Education* 130, 377-383.
- Hillmann, R. B., Brooks, C. I., & O'Brien, J. P. 1991 Differences in self-esteem of college freshmen as function of classroom seating-row preference. *Psychological Record*, 41, 315-320.
- 加来慎也 1987 社会的同一性 小川一夫(監修) 社会心理学用語辞典 北大路書房 p.136.
- 狩野武道・津川律子 2011 大学生における無気力の分類とその特徴—スチューデント・アパシーと抑うつ—の視点から— 教育心理学研究, 59, 168-178.
- 川西千弘 2006 女子大学生の座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性 京都光華女子大学研究紀要, 44, 211-232.
- 川西千弘 2009 女子大学生の座席選択行動を規定する要因 年報人間関係学, 12, 33-43.
- 栗林克匡 2014 公的自己意識が授業中の携帯電話における迷惑行動に及ぼす影響 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 51, 51-59.
- 松本廣子・松嶋紀子 2008 高校生の生活習慣に関する調査研究—授業中にみる居眠りについて 大阪教育大学紀要3 自然科学・応用科学, 57(1), 55-70.
- 宗像 剛 1997 大学生のアパシー傾向の男女別検討 心理学研究, 67, 458-463.
- 中村 真・松田英子 2015 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響(2)—出席率, GPAを用いた分析— 江戸川大学紀要, 25, 135-144.
- Rebeta, J. L., Brooks, C. I., O'Brien, J. P., & Hunter, G. A. 1993 Variations in trait-anxiety and achievement motivation of college students as a function of classroom seating position. *Journal of Experimental Education*, 61, 257-267.
- 坂本真士 2005 大学生の授業評価に関する研究—一般的授業選択態度および授業への授業動機づけの点から— 大妻女子大学人間関係学部紀要, 6, 211-221.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 日本教育心理学研究, 43, 145-155.
- 高瀬克義, 内藤勇次, 浅川潔司, 古川雅文 1986 青年期の環境移行と適応過程(1)—質問紙の作成— 日本教育心理学会総会発表論文集, 28, 556-557.
- Tindell, D. R., & Bohlander, R. W. 2012 The use and abuse of cell phones and text messaging in the classroom: A survey of college students. *College Teaching*, 60, 1-9.
- ト部敬康・佐々木 薫 1999 授業中の私語に関する集団規範の調査研究—リターン・ポテンシャル・モデルの適用— 教育心理学研究 47(3), 283-292.
- 山口正二 1999 アパシー 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花 政・箱田祐司(編著) 有斐閣 心理学事典 p.14.

(受稿: 2016.1.19; 受理: 2016.11.2)